

第七章

おおげさだなあ



もう一つの名をこの章に与えれば「個の章」であろうか。連帯を希求しつつ、しかもそこに溶解してしまわぬ個の実存。

「オレたちの村を創ろうと宣言する」のもまた、個の態様の一つである。

描かれ、うたわれているさまさまの別れの後の、新たな邂逅の姿を想像させられる。それがいかに衝撃的であつたか、失意の連続であつたか――を。

のびたつめ

■関口 明男

のびたつめにひびがはいる夜　をぼくはまっていた。

NO-72-25

ぽつんとひとりで屋根の上にあがってタバコをふかしている、どここの家の屋根にもやっぱりそうやってひとりすわっている男がいるような気がしてならない。

おおげさだなあ

そのI

安田講堂が 陥ちた夜に

ぼくが

孤独で マスタアヘションをしたのは

原罪の具象だ、なんて

きみは おおげさだなあ

■すぎ たけし

おおげさだなあ

そのII

逆さに転がった 紅いヘルメットと

ぼくを

連帯させた放物線の意味は

まさにアナアキティックだ、なんて

きみは おおげさだなあ

(共に六九・三・二二)

香川県・個人通信紙「私信ほっこまい」号外より

「おおげさだなあ」そのI
安田講堂が 陥ちた夜に
ぼくが
孤独で マスタアヘションをしたのは
原罪の具象だ、なんて
きみは おおげさだなあ

「おおげさだなあ」そのII
逆さに転がった 紅いヘルメットと
ぼくを
連帯させた放物線の意味は
まさにアナアキティックだ、なんて
きみは おおげさだなあ

「おおげさだなあ」そのI
安田講堂が 陥ちた夜に
ぼくが
孤独で マスタアヘションをしたのは
原罪の具象だ、なんて
きみは おおげさだなあ

「おおげさだなあ」そのII
逆さに転がった 紅いヘルメットと
ぼくを
連帯させた放物線の意味は
まさにアナアキティックだ、なんて
きみは おおげさだなあ

「おおげさだなあ」そのI
安田講堂が 陥ちた夜に
ぼくが
孤独で マスタアヘションをしたのは
原罪の具象だ、なんて
きみは おおげさだなあ

「おおげさだなあ」そのII
逆さに転がった 紅いヘルメットと
ぼくを
連帯させた放物線の意味は
まさにアナアキティックだ、なんて
きみは おおげさだなあ

「おおげさだなあ」そのI
安田講堂が 陥ちた夜に
ぼくが
孤独で マスタアヘションをしたのは
原罪の具象だ、なんて
きみは おおげさだなあ

「おおげさだなあ」そのII
逆さに転がった 紅いヘルメットと
ぼくを
連帯させた放物線の意味は
まさにアナアキティックだ、なんて
きみは おおげさだなあ

「おおげさだなあ」そのI
安田講堂が 陥ちた夜に
ぼくが
孤独で マスタアヘションをしたのは
原罪の具象だ、なんて
きみは おおげさだなあ

「おおげさだなあ」そのII
逆さに転がった 紅いヘルメットと
ぼくを
連帯させた放物線の意味は
まさにアナアキティックだ、なんて
きみは おおげさだなあ

「おおげさだなあ」そのI
安田講堂が 陥ちた夜に
ぼくが
孤独で マスタアヘションをしたのは
原罪の具象だ、なんて
きみは おおげさだなあ

「おおげさだなあ」そのII
逆さに転がった 紅いヘルメットと
ぼくを
連帯させた放物線の意味は
まさにアナアキティックだ、なんて
きみは おおげさだなあ



オレたちの 村を創ろう

「リユーン」

月刊キブツ72・11・12合併号
島根県弥栄之郷 共同体日記

オレたちの村を創ろうと宣言する。
世界のどこを捜してもないような村を。

他者^{カキ}に雇われるのはいやだ。

他者のために働くのはもういやだ。

金もうけのためにだけ働くのはもういやだ。

いやなことはいやだと言える世界を創ろうと

宣言する。

日本のどこを捜してもない世界を。

ほんものの空の下で

ほんものの空気を吸って

ほんものの労働をする

ほんものの社会を創ろうと宣言する。

国家のいない社会を

オレたちのことは

オレたちでやっていく社会を

役人も、警察官も、商人もない社会を

オレたちは本気で創ろうとしている

忘れかけているオレたちの、

オレたちの村を創ろうと宣言する。

オレたちがオレたちであるために

オレたちがオレたちをとり戻すために

悪しき連帯を断ち切り 孤独のさすらいに立て！

■内藤 勝也

I

それでも私達の時は経ち
それでも私達の若さは崩れ
それでも私達の力は萎え
それでも私達の情熱は尽きて行く

II

修羅場をみることはたやすく
自然の安寧をみることは
浄土の扉を叩くことより難しい

どちらも敢えて見ようとしないうまえには
鎖の中の自由が

ガラスの破片のように全身を傷だらけにするだけだ
おまえの感性が
活字に化けた修羅を掴まえることができたとしても
それは不快な衝撃となつて
心の奥に貯えられるだけに違い
貯えは永劫に貯えてしかなく
おまえの埋められた死体と共に
土の餌に供される運命
決しておまえは修羅場をみることもできず
自然の安寧をみることもできない

この手の中に

この眼の中に

修羅を捉えよ！

至難の安寧に希望を託すよりは

我々の背後に蠢く

人間を奪いとする修羅を捉えよ！

III

物陰に

この太陽に見離された廊下の途切れに

易しさの性悪が貼りついて

私達をいともたやすく

昔の私達に戻し

今の私達を揺さぶり

変わりゆく私達を呼び起こし

消えゆく私達を映し出す

私達の繋がつた糸は

やさしさの性悪の捻出するままに

今日を縛りつけ

明日に縛れる

私達を飲みこんでいる性悪の為にのみ

私達は心に重い十字架を背負っている

私から私の中の貴方へ

なに故に私達の歩む道を断罪できるであろう

なに故に私達の逃げる道を鎖し

混沌の窒息の呪縛に慰めを持てと言えよう

私達が描く性悪の思考は

それだけが変わりなく

地球の重味に等しい

IV

限りのない悪徳を尽くして

法門に到達することもあるいは可能だろう

歪められた人間性の純粹

その内から湧き上がる絶対無の世界

それこそ

人間の絆を断ちきる教えではあるまいか

私達の心に潜むすべての人を

永遠に放逐することによって

私達は神に近づき

私達は涅槃の世界を見ることができると!?

美しき性の高遠さはあまりに尊大であり

悪しき性の深遠さはあまりに闇に包まれ

私達はそのどちらをも

選ぶことは難しい

私達の行き着くところは透明すぎ

私達の帰り来るところはぼんやりすぎ

神にもなれず

悪魔にもなれず

臨終の床で人間であつたことを

一途に証明する任務が残っているだけだ

人間であつたことの証明

そのために 畜生！ ただそのために

苦渋と辛辣の時代と闘わねばならない

人間臭い呪いの声に

永劫の魂の空洞を震わせる時

恐怖の息づく響音に

じつと耐えることのみを知つた

孤独の中の私達の絆

〈未完〉

大阪大学文芸部「奴隸海岸」
昭和四十六年七月九日発行

闘いに

■ 神田 賢一

闘いに

遠く聞えるのは 波の音

小さな赤い蟹の葬列

真赤にサじた孤独

もう馴合になつてしまつた朝



闘いに

お爺のお小言や機動隊のコン棒よりも
一人の娘の一言で
涙を流すことを知った その時から
僕は活動家になったのだ。

故郷へ帰った友よ

すべてに退廃を帰してかえっていつた友
何も解らないままにかえっていつた友
君は帰る故郷があるからいい。
僕はここに とどまるしかない。

わらえ

わらえ

たのしいことは
もうこないから

「作品2」

■清野 浩志

人間のぬくもりがいやだ
人間のあたたかさがいやだ
そうだ
自分のまわりのもの
そんなものの全てがいやだ
ひややかな墓場に帰りたい
どうなることもない
何を望み 何を捨てるのか
どうでもいい
どうてもよくなった
もう 全てがいやになった
自分が死ぬところの
そんな空間が

どこかに
ある
いや
ないのか
それとも
わからない
いいんだもう
どうでもいいんだ
私は人間
私は物体
人間がいやだ
自分がいやだ

青空

■川瀬 健一

死人が青空で
死人のメモデーをかなでる
怒りの渦で死んで
何故 帰らぬ

死骸を越えた者は
死人の街へ去っていく
流血の旗は黒く染まり
怒りと悲しみの渦

死人が青空で
死人のメモデーをかなでる
死人の涙か
死人の連帯か

卒業するものたちへ

■たかはら おさむ

古びた制服をぬぎすてるがいい。

頭の中に巣をつくっている

たくさんのウソも

さっぱり払いのけてしまうがいい。

教科書にもない世界がある。

きれいなことばで飾られた

祝辞にない社会があるのだ。

まぶたにやきつけられた

倒立した虚像をかき消すがいい。

ある日 きみたちは

鉛筆で争いあう群だった。

ムチでたたかれながら

狭い囲いの中に追いたてられる

羊の群だった。

青空も太陽も

きみたちのものではなかった。

広々とした草むらでは

禁断の木の実のある樂園だった。

青白く目のくぼんだきみたちは

笑い声も足音もたてなかった。

うたを忘れたカナリアのように

青春から見すてられていた。

だが ぼくには

なにもあたえるものがなかった。

それでもきみたちから

たくさんのものをもらった。

教室の片すみに身をちぢめて

窓から外ばかりながめながら

たいくつて息苦しい日々を

じっとたえつづけてきたがまん強さが

ぼくに心の痛みをくれた。

さあ きみたち

いまわしい過去をかなぐりすてよう。

学校生活へのノスタルチアは

かびくさい青春の歴史でいっぱいだ。

そして いまからは

ぼくたちの仲間になるんだ。

もうなんでも堂々と語りあえる

仲間になると約束しよう。

カレーライスに寄せて

■赤垣 幾代

帰省する日が近づいたので

お別れの日ライスカレーを食べました

電話下さいとの言葉をききました

新しい出発のため忙しい日は過ぎたのです

上司との対立で会社を去っていました

身体を北風が大きな穴をあけました

同じ店の同じテーブルに腰かけていたので

忘れられないライスカレーを食べました

でもあの日の味はありませんでした

それ以来ライスカレーは食べないのです

食はず嫌いねと誰かがいいました

さ、やかな思い出として大切にしましょう

やがて

妻となり 母となつて ライスカレーを作るでしょう

きつと

夫や 子供達と静かにライスカレーを食べましょう

別離

■佐伯 正博

富山、夜のプラットホーム

4番線ホームに信越線經由上野行

“越前”がもう来る

ボク

男にささやいた

〈体だけはいじにしなければね〉

男

ボクにささやいた

〈お前の方こそだいにしなければいけない〉

二人して頷き合った

ホームに“越前”の音が響いて来た

ボク

一寸笑ってみせた

八分の間

別に話はなかった ただ

〈体をだいにしなければね〉

を

二人で繰り返していた……

ベルが鳴った

男

つぶやいた

〈お別れたね〉

ボク

黙って頷いた

男

デッキに飛び乗った

男へ「じゃあ」と言った

ボクも「じゃあ」と言った

“越前”がゆつくりとホームに横づけとなった

デッキからヒトが降り行き

デッキからヒトが列を作って昇って行った

男

夜の間立ちん坊しなければならぬか

と心配していたが

幸い空席が待っていた

荷を順序に棚に上げて

暫くしてデッキから降りて来て

〈八分程止まっているらしいね〉

“越前”

ゆるやかに男を乗せて動き出した

男

手を振った

ボク

手を上げたまま

動けなくなった

歩く者

■清水 豊

ぼくは歩いた。
海沿いの島の道を。
吹きつける雨に
全身を焼かれながら。
ぼくは歩いた。
ひとに出会うために。
出会ってひとが心にかけて続けてきたものを
まっすぐにとりこむために。
とりこんでそれから
行きずりの旅人ではない
ぼくはどう関わるか
みずからに問い問いを問うために。
ぼくは歩いた。
激しい西風を背にうけて
目に押し入ってくる

鋭い痛みをこらえながら。
ぬかるみの道を
小走りに駆けてくる小犬のように。
もつれる足で
水溜りの泥はねあげて。
ぼくは歩いた。
ふりしきる雨のなか。
雨のむこうから
音もなく伝わってきて
心をしめつける
浜で息絶えたものの
見果てぬ夢。
頂きに投げ棄てられたものの
にがい記憶。
それから

傾斜畑で息づかうものの

ふかい営み

それをひとつひとつ

心にとどめて。

いつさん。『Da』2号 (1968、6:30)

去り行く友へ

■丹山 清英

この薄暗い工場で

互いにみがいた腕と心

ぼくは君の意見を認め

君もぼくの意見を認めた。

それなのに二人は別れようとしている
だが

互いに自由に言い合える基盤を

守り抜いたことを誇りしよう。

たとえ二人の考えが違っても

今度手をにぎり合うのは

自由にものを言えなくする相手と戦う時だ

友よ

離れても忘れるな。

友へ——十八から十九へ

■早川 じゅん

どこかへ行きたいね。そうどこかへ!!

逃亡だ。まちがっても新しい生活なんかみつかるた
めじゃない。

何もかもメンドウになれば

友達に電話して、今夜つきあって”って言って

寒い夜にナンバまで歩いて、

帰りは地下鉄で戻って来て、

彼女に何もしゃべらせないで、

一人でしゃべって一人で笑って……。

”少し考えてみたい”……なんてことはもう言わない。

もう、メンドウになった時は、逃げだしてやる。

あとは何とも言え!!

文句あるか?

似合わなくても

ジーパンにズックでデモに行って

機動隊に持ち物検査されたら

素直に交通費の百円玉一つだけ差だして

相手は、こっちのこと、髪が長くて顔がわからないから

男だと思って

”しっかりやれよ”と言ってくれる。

お互い様?

街角で集会やってたら

ヤジ馬根性でわりこんで

ビラもらって、よその誰かと

少し話して……。

でも、もうそれもメンドウだ。

自分の言葉で話してみたいよ。

私が恋愛映画のパンフレットもってて

なぜおかしい?

”日和ったのか”だって?

映画みたら悪いのか。

恋愛映画だったら悪いのか?

日和ったとても反革命とても何とも言うってくれ。

過大評価してくれるな!!

息がつまる。

やりたい時にやる。

したくないことはしない。

今は、弁解用にたくさんさんの言葉と理由を用意して、

本当はマンガよんだり、

地図ひろげて、

あっちへいきたい、こっちへいきたいと思ってる。

それで文句あるか?

しつこいゾ。

私は私、あなたはあなた、

人のこと、考えてくれるのもいいけど、

ありがたいけど、自分のことは、

自分でやるよ。

そう一人で!

ころんでも、立ちあがってみせるよ。

せせら笑ってるあなたの前でネ!!

——一九七二・四・三